



せせらぎの会
(岐阜県図書館

視覚障がい者
サービス協力者)

奨励賞贈呈式



(上写真 前列左から、武山さん、山本さん、竹内さん、小森さん)

障がい等で活字による読書ができない方々のため、耳で聴いて読書できるように活字を音声化したものを『録音図書』と言います。

この『録音図書』は、朗読録音奉仕者や音訳者、音訳ボランティアと呼ばれる方の活動に支えられています。

「朗読録音奉仕奨励賞（後述）」の受賞者であり、せせらぎの会で一番永きに渡って録音図書製作に尽力してこられたベテラン音訳者の山本さんに、“音訳活動”についてお話をお聞きしました。〔令和5年11月2日・令和6年11月20日取材〕

同じく声に出して読み上げる“朗読”と“音訳”との違いについて教えてください。

“朗読”は感情を込めて読み上げたりしますよね。

一方、“音訳”は視覚からの情報を得ることが困難な方のため、『そのまま読む』ことを原則としていて、場面に合わせて声色を変えたり、間を作ったり、読む速度を変えるといったことはしないんです。

“朗読”では語り手が自身の解釈を加えて魅力ある作品として聞き手に伝える面白さがあり、“音訳”では敢えてそれを控えることで聞き手自身に本の世界をイメージしていただく「余白」を残す良さがありますね。

そうですね。

そして、“音訳”では活字だけではなく、書いてある全てを分かりやすく読むという点が“朗読”と大きく違います。書籍だけではなく、雑誌、新聞、行政の広報等も“音訳”の対象としていて、図表、写真、挿絵についても文章化して正確に伝える必要があるんですよ。

つまり、“音訳”は“書籍”と同じことを「音声」のみで伝えているということですね。

文章化されていない部分を言葉で表現するのはとても難しく、技術や経験が必要になると思うのですが…。

ええ。表やグラフは縦と横の事実を読めばよいので比較的説明しやすいのですが、写真については状況を文章化して説明することが難しい時があります。

例えば野球選手の現役時代のポートレート（写真）が掲載されていたとして、「性別」、「髪型」、「服装」等を説明するのは簡単ですが、それ以外をどのように伝えるのが難しく、経験を要します。

ここでやってはいけないのは、写真から受ける印象…つまり主観を伝えてしまうことなんです。音訳では「客観的」によりよく伝えることが大切なんですよ。

山本さんが“音訳”を知り、志したきっかけは何でしたか。

平成7年に岐阜県図書館が岐阜公園内から現在の場所に移転したのを覚えていますか？

私は移転後すぐに訪れたのですが、その時に“視覚障がい者サービス協力者”の1期生募集があることを知りました。そこで応募してみたのですが、残念なことに書類選考で落ちてしまって…。

書類選考があったんですか。

ええ。当時、募集定員は30名だったところに、定員より多くの応募があり、書類選考があったんです。

今では『音訳講習会〔初級課程〕』は3年に一度しか開催されていませんが、毎年「書類選考」と「音訳講習会〔初級課程〕」があったんです。

翌年に再チャレンジした時には、「音訳講習会〔初級課程〕」を受講することができ、2期生になりました。

あの頃は学生さんや子育てが一段落した30代くらいの若い方々からの応募が沢山あって、かく言う私も30代での応募でした。

活動をしていて、どのような時にやりがいを感じますか。

利用者さんから「目が見えなくなって大好きな本を読めなくなって絶望していたけど、録音図書を知って希望が持てた。利用できてよかった。」とすごく感激した様子でお礼を言われると、すごくやりがいを感じます。

また最近では利用者からのリクエスト本以外に、国立国会図書館やサピエ図書館（※1）に登録のない録音図書で自分がお勧めしたい本の音訳にも積極的に取り組んでいるのですが、音訳した録音図書が今年の上半期に50回以上の利用があったと知った時には嬉しかったですね。

（※1）サピエ図書館とは、日本点字図書館がシステムを管理し、全国視覚障害者情報提供施設協会が「運営」を行っているデータベースのこと。利用者は自宅にしながら、点字・録音図書の検索をはじめ、点字データ、^{デジタル}DAISY（※2）データなどのダウンロードが可能。

（※2）^{デジタル}DAISY (Digital Accessible Information System) とは、視覚障がいなどで活字による認識が困難な方のために製作されるアクセシブルなデジタル図書の国際基準規格。読みたい場所への頭出しや再生スピードの変更などが可能。

その他に、心に残っている出来事がありますか。

コロナ禍は様々な活動が自粛となってしまいましたよね。せせらぎの会も活動ができない時期がありました。

その間に、リクエストをしてくださっていた方がお亡くなりになってしまって…。

以来、リクエストがあれば早く対応して差し上げたいと、以前より強く思うようになりました。

どういう事に意識して音訳をされているのでしょうか。

利用者が聞き取りやすいよう、発音や抑揚、適切な間をとっています。

そして、^{こうちゅうおん}口中音などの雑音にも気をつけて録音しています。

^{こうちゅうおん}口中音というのは、口を開ける時に「ピチャツ」、「ペチャツ」と入る音のことで、この音が入っていると何か気になるんですね。

本当なら以前より知識は増えたから上手く読めるはずなのに、私も年齢のせいか、昔は出なかった^{こうちゅうおん}口中音が最近出るようになってしまって悔しくて…。

「分かりやすく読む方が大事」、「内容、意味が分かれば O.K.」という意見もあるけど、意識高く、「より良いものを!もっと良いものを!」と、私は何度も録り直しをしています。

メンバーそれぞれに好きなジャンル・得意分野があって、棲み分けをされているのでしょうか。それとも自分では読まないようなジャンルでも、音訳を機に世界を広げるチャンスと捉えて引き受けるのでしょうか。

【山本さん】 県内にはせせらぎの会以外の音訳ボランティアの会もありますが、私達せせらぎの会の活動拠点は県図書館なので、いつも傍には司書さんがいらっしゃるし、珍しいジャンルの本も揃っていて、『調査』をするのに心強い状況下にあります。

なので、私はどんなジャンルでも引き受けるようにしていて、分からないことは頑張って調べたり、司書さんに相談したりして取り組んでいます。

リクエスト本には、哲学や古文、経済、宗教など、自分ではなかなか読まないジャンルのものも多くあります。

【市川主査】 『神学大全(※3)』の音訳を担当されていた時は大変そうでしたね。

宗教物であり、ラテン語の記載もあったから…。

【山本さん】 ホントに大変でした(苦笑)

引き受ける時には、これを機に興味の対象が広がるといいなと思っていないわけでもないけれど、完成させた後にその分野が楽しくなるってこともあまりないかも(笑)

それでも引き受ける理由は、一人でも読みたいと思っていらっしゃる方がいれば、その気持ちに寄り添い、お届けしたいという一心につきますね。

(※3) 『神学大全』とは、中世ヨーロッパを代表するキリスト教信仰の書物で、西洋哲学の古典。13世紀後半のトマス・アクィナスの『神学大全』が最もよく知られている。

今後の目標、課題等がありますか？

昔はがむしゃらにやるだけだったけど、良いものを知ったり、知識が付いたりしてくると理想とのギャップがもどかしくなります。でも、最近では突き詰めすぎない楽観的さもある程度必要だとも感じています。

それと、せせらぎの会の仲間を増やすことと、利用者を増やすことです。

届けられる本を増やしたいですし、リクエストには早くお応えしたい。そのためには、仲間が多くないと。

せせらぎの会には70名程の仲間がいた時代もありましたが、今では総勢25名。

大勢いた初期メンバーもそれぞれの事情で辞め、今では1期生は誰も残っておらず、2期生は私を含む2名だけなんです。

また、“録音図書”を利用してくださっている方は、まだまだ視覚障がい者や高齢者の極一部でしかないので、もっと多くの方に知ってもらい、利用していただけたらと思います。

山本さんにとって“音訳活動”とは？

初めは視覚障がい等のある方のために始めた活動でしたが、今では音訳が私の生きがいになっています。

ともに活動してくれる仲間や図書館職員の方々の存在があってこそということに感謝し、これからも続けていきたいと思っています。

岐阜県図書館障がい者サービス担当 市川主査への取材

近年、岐阜県図書館では3年を1サイクルとして、『音訳講習会〔初級課程〕』、『音訳講習会〔中級課程〕』、『音訳講習会〔校正課程〕』を順に開催しています。

当館で活動していただくためには、音訳講習会〔初級課程〕の受講が必要です。

岐阜県図書館の“視覚障がい者サービス協力者”に興味を持ってくださった方は、岐阜県図書館のホームページをご覧ください。

岐阜県図書館ホームページ「視覚障がい者サービス協力者」

<https://www.library.pref.gifu.lg.jp/supporter-volunteer/disabilities-support/>

また“音訳者”によって作られた『録音図書』は、視覚障がいの方だけではなく、上肢に障がいがある方やディスレクシア（※4）の方もご利用いただけます。障害者手帳をお持ちでなくてもご利用いただけることがあります。

是非図書館までご相談ください。

（※4）ディスレクシアとは、学習障がいのひとつ。全体的な発達には遅れはないが、文字の読み書きに限定した困難があるため、本邦では発達性読み書き障害と呼ばれることもある。（国立成育医療研究センター参照）

「第 54 回朗読録音奉仕者感謝行事」について

公益財団法人鉄道弘済会は毎年、社会福祉法人日本盲人福祉委員会と共催で、「朗読録音奉仕者感謝行事」を開催し、視覚障がい者の読書環境の向上に尽力される朗読録音奉仕者や、朗読録音奉仕者養成において指導にあたっている方、録音図書の質的向上に欠かすことのできない校正奉仕者やDAISY編集奉仕者^{デイジー}に対し、地区表彰及び全国表彰を行っています。

今年度「第 54 回朗読録音奉仕者感謝行事」東海地区表彰において、岐阜県図書館のせらぎの会（岐阜県図書館所属の視覚障がい者サービス協力者の愛称）から4名が、永年にわたる視覚障がい者への情報支援の貢献を認められ、「朗読録音奉仕奨励賞」を受賞されました。令和 6 年 11 月 20 日（水曜日）に、この 4 名に対する奨励賞贈呈式が岐阜県図書館で開催され、賞状と記念品が授与されました。

贈呈式での公益財団法人鉄道弘済会の方のお言葉

録音図書に関わる奉仕活動は、地道でかつ奉仕者の努力と愛情を必要とするものであり、今後も多くの力が求められています。

こうした録音図書製作に携わる方々の活動が、さらに充実・発展することを願い、奉仕者に感謝の念を捧げるために、本行事を実施しています。

岐阜県図書館障がい者サービス担当 市川主査への取材

今回受賞された 4 名は、奨励賞推薦要件（奉仕期間 3 年以上、または朗読録音時間 50 時間以上等）を満たし、日々音訳技術の研鑽に努め、後進育成にも力を貸してくださっていることから、「朗読録音奉仕者感謝行事」開催に伴い、岐阜県図書館が推薦をしました。岐阜県図書館ではこれまでに、第50回開催時に朗読録音部門で 1 名の方を推薦し、地区表彰されています。

この推薦基準になっている朗読録音時間数というのは、「完成させた録音図書の収録合計時間」を指していて、録音の前の読みの調査や校正、編集にかかった時間はカウントされておらず、実際の録音図書の製作にはもっと多くの時間がかかっています。

視覚障がい者サービス協力者の方々の並々ならぬ献身には感謝に耐えません。

（※岐阜県図書館では、本来、図書館がすべき資料提供（そのためのひとつの方法としての資料製作）を音訳者に代行していただいているという考えから、無償のボランティアとは区別して“視覚障がい者サービス協力者”としています）